

日本消化器外科学会雑誌編集後記

早いもので今年（平成 25 年）も残すところ 1 か月となった。11 月は全国的な外科系学会・研究会が毎週のように開催され、会員の皆様には忙しい日々であったことだと拝察する。

さて、本号では 2 編の原著と 8 編の症例報告が掲載されている。原著は、「食道癌に対する術前化学療法」と「膀胱全摘後の尿路変更術」に関する優れた論文である。症例報告も考察がしっかりしており、読み応え十分な内容である。承知のように本誌は採択率の低い雑誌である。投稿論文は適切な査読コメントをもとに再投稿され掲載される例も多く、このこともあってか“和文医学系雑誌の最高峰”との誉れも高い。

小生は 2008 年 9 月から編集委員の仕事を仰せつかった。最初のころはまだ紙ベースで、毎月宅配便で B5 版の原稿がどっさり送られてきた。しかし、オンライン投稿が契機となり、原稿は PDF、査読結果もオンラインとなった。ただし編集会議は相変わらず学会事務局で侃々諤々。今後は Web 会議も模索されており、これがとくに遠方の編集委員に福音となることを期待したい。また、査読数が多いなか、さらに質の高い丁寧な査読体制を構築するため今年の秋から大幅に編集委員が増員された。これに伴って個人の負担が軽減されればと願いたいものだ。

ここで私事について報告させていただくことをお許し願いたい。本年 4 月、昭和大学横浜市北部病院消化器センター外科教授から同藤が丘病院消化器・一般外科教授に就任した。学会・本誌編集委員諸氏からも数多くお祝いや励ましの言葉を賜った。この場を借りて厚く感謝申し上げたい。

私は北部病院在任中、大連の大学付属病院から 8 年連続で外科医の留学生を受け入れてきた。そのうち二人が内視鏡外科専門の外科教授に就任した。私は講義と公開手術の招待を毎年受け、今年は結腸・直腸癌の腹腔鏡手術（1 件は完全 3D モニター下）を 2 件行った。講義では内視鏡肝臓手術と内視鏡膵臓手術の日本の現状を話してきた。また、6 月に EAES、8 月に ISW、10 月に IASGO に参加した。日本人医師が仕切るシンポジウムなども散見し、同胞として欣快であった。それらの学会には藤が丘病院消化器・一般外科からも若い医局員を連れ出し、目と耳と足で世界を知る刺激を与えた。その中で感じたことは世界をリードしている本学会がますます活発になっていってほしいことである。

今後とも若い医局員の教育・育成だけでなく、本学会の発展のため微力を注ぎたいと考えている。

（田中 淳一）
2013 年 12 月 1 日